

## マクロな移民研究とミクロな移民研究の有機的連関のために

天沼 香

### はじめに

本稿は、移民研究をおこなう際に、留意すべき視座・視点に関して考察するものである。わけても次の3点にこだわった。第1には、マクロな視座とミクロな視座とを有機的連関をもたせて混交させるなかで移民という状況を論じること。第2には、日本——のみならず欧米諸国——における資本主義の発達とその担い手としての移民という視点を重視すること。第3には、2に関連して、常に移民受容国の「プル」の意味合いと、移民送出国の「プッシュ」の意味合いの相互の関連を射程に入れながら入移民、出移民を捉えること。

本稿は、この3点へのこだわりの表出の論、そのこだわりをもとにした実際的な研究への序論を成す論といえよう。

本稿は、筑波大学日本語・日本文化学類において様々な角度から「移民」を論じた特別講演(2003年度)の講義ノートおよび実際の話の録音テープをもとに、纏め直し、書き下ろしたものの一部である。近代日本における移民の位相と諸相を——世界的連関のなかで——明らかにしようとしている私の作業の一環を成す作品といえよう。

### 1.

移民研究に際して、まず前提として把握しておかなければならないのは、移民とはどういう存在なのかということであり、又、移民

という状況はどうして起きるのか、ということである。

大状況的な問題との絡み合わせのなかで移民を考えることは、個別的な問題として移民を捉えることともども肝要なことといえよう。国家のありよう、あるいは国際関係のありようによって、時に自らの自由や意思を踏みにじられることも多々あるのが移民の人々だからである。

例えば、日米・日加開戦の直後には、米国西海岸在住の日本人移民そして日系米人、すなわち米国籍をもつ二世・三世も、カナダ西海岸、ブリティッシュ・コロンビア州のバンクーバーやスティブストン、その他に住んでいた日本人移民・日系カナダ人も、「転住」と称して強制収容所に送られ、そこでの不自由な生活を強いられることになってしまったのだ。

上記のような例ひとつを取り上げるだけでも明らかなように、国家間の関係が直接的に～自らの意思には関わりなく～自らの身に覆いかぶさってくるのが移民の人々の歴史的現実であった。こうした点に鑑みると、ドラスティックな大状況に翻弄され、又、抗いながら生きてきた民衆の軌跡を歴史研究の基底に据えたいと考える私なりの視座から考えても、移民の人々に対するアプローチには大きな意味があるといえよう。

こうした大状況との絡み合わせで移民を見る歴史的視座とともに、私は個として、あるいは集団としての移民の文化変容、アイデン

ティティの問題にも関心を有している。カール・レビットは、「我々は常に何か異なる他者と区別される時に、初めて自己の生活様式や自らの特性を自覚する。だから、他国の人と接触を持たない人は、自己の本性・本質を知らない」という。つまり、自己を知らないのは、自己を明確に認識していないのは、他人の別のあり方、別の生き方、生活様式、あるいは、思考といったものを知らないからだというのである。

これは今や常識的な思考ではあるが、同質性の高い社会に住む日本人にとっては、いまだにもって銘すべきことでもある。日本人移民の人々も、移民をする前に日本のそれぞれの生まれ故郷で生活をしていた時には、当然の事ながら日本人としての自らの存在をいかなる存在であろうかというようなことを問うといったことはしなかった。

ところが、ハワイに移民する、北米大陸のいずれかの地域に住む、南米の奥地に定住する、その他もろもろ日本以外の国・地域へ出かけて行って、新たな生活をするになると、そこで自分とは違った皮膚の色、目の色、髪の色等々、異なる形質の人々と日常的に接さざるを得ない。彼らは、自分たちとは言葉も、思考や行動の様式も違う。

そうした人々と日常的に接触をする中で、日本からの移民は、みずからのアイデンティティを問うことになった。その際には、自ら自身のアイデンティティを問うという面と、もう一つ、自らの日本人としてのアイデンティティを問うという面の二つの側面があった。

そのうち、自ら自身の個人としてのアイデンティティは、ある程度は日本にいても確認せざるを得ないし、してきたことであろう。

けれども、自らの日本人としてのアイデンティティに関しては、日本にいるときには認識する必要はなかった。海外では、それを認識せざるを得なくなる。つまり、日本を離れて異郷の地で、自分とは全く異なった人々と接触をすることによって、自らの存在とい

うものを明確に認識し直さざるを得ない状況下に置かれるからである。

そういう意味において、移民の人々は日本を強く意識する。移民地においては、日本以上に日本が存在しているというような表現がなされることも上記と無関係ではありえない。

まだ移民地には、明治・大正、戦前の日本が残っているといた表現をする人がいるくらいに、今日の日本においては最早、殆ど見られなくなってしまったようなかつての生活様式や風俗習慣が、海外の移民地においてはまだ残存していることもある。

これも移民の人びとの、日本人としてのアイデンティティを保持しようという意識の具体的な表出のひとつと考えられる。こうした関心は、文化人類学や歴史人類学の視座からの微視的な移民へのアプローチによって解明されよう。

## 2.

また、人口問題、人口移動という問題と絡めて移民を捉えるという視座もあるが、これは取りも直さず資本主義の発達との関連のなかで移民を考える歴史学的な巨視的な視座といえよう。

日本の資本主義は、西洋諸列強の資本主義に比べると、かなり遅れて開始されたものであるだけに色々な意味でいびつなものになってしまっていることは周知の事実である。そして、そのいびつな日本の資本主義の発達のあり方が、実は日本の移民のあり方、日本人の海外移住のあり方にも影を落としていると言わざるを得ない。

例えば、巷間において満州移民と称されている存在～これは私としては満州植民と称すべきと考えている～など、そのいびつさが突出した人口移動だったといえよう。

その国家の主権が及ばない地域への、その国の人間の移動が移民である。とするならば、当時の大日本帝国の影響をもろに受けて

いたというより、日本の傀儡国家そのものであった満州国への当時の日本人の移住は、移民ではない。これは紛れもなく一国（日本）の主権（に近いもの）が及んだ地域へのその国民（日本人）の移住なのだから植民と称すべきなのである。

この満州植民も、日本が後発の資本主義国家であったこととの絡み合わせで捉えると、その意味合いが明白に見えてくる。日本にとっての先発の資本主義諸国＝欧米諸列強は、資本主義的生産を発展させていく段階で、大量生産、大量消費を繰り返して、拡大再生産の実を挙げていった。

それは必然的に、原料の供給地を求め、さらには生産した製品を売りさばく市場を求め＝植民地を獲得しようとする国家的営為に繋がっていった。そうした歴史的経緯の中で、ヨーロッパ以外の国々が次々に植民地化されていった。

こうしてヨーロッパ諸国において資本主義が発展していき、それに伴って植民地が必要になるという流れの中で、結局、そこへの人口移動も必然的に起きてくる。宗主国は植民地をうまく経営するために本国人を植民地へ送り込む。

これ以降の話は、植民地経営論ということになり、話が拡散してしまうので深入りは避けよう。しかし、その欧米諸国の植民地経営に関しては、土地に関する関心は割合に少なかったという認識が一般的だが、私は必ずしもそうではなかったのではないかと考えている。そのことには少々、触れておかなければならない。

例えば、アメリカ新大陸にイギリス人やフランス人なりが陸続と入り込んでいったが、その入り方は決してフェアなものではなかった。

アメリカ・インディアンと称される人々～このアメリカ・インディアンという称し方にしても、これはもともと白人が誤って認識したものを、そのまま彼らに対する呼称として用いるのはよくないということで、ネイティ

ブ・アメリカンと称するほうがいいといわれたりもする。けれども、それでもまだアメリカという名称自体がアメリゴ・ヴェスプッチにちなんで付けられている以上、やはり、これは白人の影響下に置かれている呼称と言わざるを得ない。このように考えてしまうと、呼びようがなくなってしまうわけで、むしろ、それだったらたとえ事実誤認に基づいた呼称であったとしても、アメリカ・インディアン、あるいはカナダ・インディアン等と称したほうがまだよいのではないかといった見解もあったりして、その辺りはまだ決着がついていないようだけれども～が、ごく平和に農耕生活を営んでいた所へ勝手に白人たちが入り込んできて、アメリカ・インディアンの人々の基本的な思考の中には存在していなかった「契約」という概念を無理やり持ち込んで、つまり、彼らをだまして、彼らの土地を取り上げるといったことを平然としていったのだ。

そうして、彼らをどんどん不毛の奥地へ追いやってしまったというような事実一つを取りあげただけでも、欧米諸列強の植民地経営が、土地に対しては淡々としていたという見方は破綻する、と私は考えている。

かつて、白人サイドから開拓史を描いたアメリカ映画～あの西部劇～が非常にもてはやされた時期があった。ジョン・フォードの監督、そしてジョン・ウェイン主演の西部劇といえば、お決まりのように騎兵隊がかっこうよく出てきた。西部開拓に従事する善良な白人たちが、努力をして土地を切り開いていく。それに対して悪者扱いのインディアンが襲い掛かってくる。それを騎兵隊が蹴散らす、白人たちが団結して、彼らをやっつけるというような、決まったパターンの劇だった。

これは、白人の手になる明らかな自らの正当化、インディアン悪玉論の刷り込み以外の何者でもなかった。言うまでもなく、これは到底、肯定しえない認識であった。

インディアンの人々が平穩に暮らしていた

ところへ勝手に入り込んでいって、彼らに無い概念＝「契約」を彼らに押し付け、彼らをだまらず形で彼らの土地を略奪し、彼らの文化を蚕食していった悪玉は白人たちだったのだ。

あまつさえ、その自らの行為をマニフェスト・ディステニーと称して、それこそ神から与えられた使命であるといった僭越なことを言って、白人たちはアメリカ全土を開拓していった。アメリカ西部開拓史は、白人たちによる原住民虐殺史、略奪史そのものなのだ。

白人たちは、～彼らの観点からするならば～新大陸で発展を遂げた、西部を開拓していった、フロンティア・ラインをどんどん西漸させていったといった認識を持っているわけだが、そういう彼らの西部開拓史、アメリカ植民史は、当然、ヨーロッパにおける資本主義発達史と有形無形の関係を有していた。上記のように、アメリカ白人の認識を否定的に相対化して、初めてアメリカの歴史の客観的かつ十全な構築が可能になるだろう。

### 3.

「アメリカの歴史は、すべからく移民史である」といった認識を、アメリカの少なからぬ歴史学者たちは共有している。確かにその視座は誤りとはいえないだろうと私も考えている。もともと僅かな数の原住民が住んでいた所に多数の白人が入り込んできて、開拓をしていくという歴史であるから、白人サイドに立ってみれば、アメリカ史はイコール移民史であるという見方は、誠に全うな見方かもしれない。

ところが、それでは現実に移民史的な視座がアメリカ史の中心に置かれているかといえば、全くそうではないといわざるを得ない。

話は少々、横道にそれる。プレ・ヒストリーという言葉は、日本的な共通認識で言えば先史時代、つまりは書かれたものがない時代の歴史ということで了解される。ところ

が、米国やカナダにおいてプレ・ヒストリーというのはたかだか二、三百年前以前のことに過ぎない。要するに、米加において、プレ・ヒストリーと称されて語られるのは、白人たちが入ってくる前のアメリカやカナダの歴史のことなのである。

白人たちにとっては、自分たちがそこを蚕食し始める以前の新大陸の歴史はプレ・ヒストリーに過ぎないのだ。米加の各地にある歴史資料館や博物館に行ってもプレ・ヒストリーという文言は臆面も無く顔を出しているという現実がある。白人たちにとって、自分たちが来る前の新大陸の歴史的考察など全く意味のないものであるかのごとくなのである。

アメリカの西部開拓史は、原住民サイドから見れば、横暴な白人の侵略史、移民史として認識し直せる。先に、「契約」という概念がインディアンの人々には無かったことに触れた。

そもそも彼らの間にあっては、土地に関しても、土地所有の概念もさほど明確ではなかった。彼ら、特にナバホ族などにおいては、土地は自分たちの子孫から預かっているものだというような認識がある。したがって、それを自分たちの世代が占有して、そこを自分の自由に使うというような発想は稀薄だった。

それに対して、白人たちが自分たちの文化のあり方、社会契約のあり方等を押しかけて、彼らの土地を取り上げるというのは、そもそも不公正といわざるを得ない。異文化空間における価値観を無視して、自らの文化体系における価値観を一方向的に相手に押し付ける所業といえよう。

そうしたことを敷衍させて考えていくと、白人たちが新大陸にやってきたこと、そして、ネイティブの人々と接触をしたことは、異文化接触という観点からもみることができよう。移民史は、そういう点からみると異文化接触の歴史といった観点から覗くこともできるのである。

白人たちが入り込んできて、どんどん西漸していく。そうした中で邪魔な存在と彼らが見放したネイティブの人々を肥沃な土地から追い出す、抹殺する、あるいは居留地へ囲い込むというようなことをする。そうして、自らと同じ人種・民族の呼び寄せをする。

産業革命、そしてブルジョワ民主主義革命を達成して、近代国家としての歩みを始めていた当時の西洋列強諸国においては、国内において労働市場がどんどん拡張されていた。そうした中でも、やはり、労働者の中でも層の分解は顕著に見受けられ、農民層の分解も進行した。

こうした状況の下、都市生活者においても、農村生活者においても、自らの現状に不満を持ち、なんらかのかたちでその現状を打破したいと考える人々が増大する。そこで、そういう志向の人々の受け皿として新大陸が大きな役割を果たすようになるのである。

#### 4.

当時のヨーロッパ諸国にとって、南北中米大陸は、自国の人口調整の場、自国の資本主義の発展と相まった人口移動の可能な場所というような意味を有していた。

さらには現状に対する不満の中で呻吟する個々の人々の、ビジネス・チャンスのため、自らのステップアップのため、自らの新規まき直しのためといった個人的なモチベーションも、移民の意味として重要視すべきであろう。

このように、国家的な観点、あるいは国際関係の観点、そして個人的な観点とを相まって考える中で、はじめて人口移動としての移民を構造的・立体的に見ることが出来る。

このような本国の側の事情をもとにして、それに植民地の側の事情をも勘案するならば、もともと住んでいた人々を蹴散らしてしまい、労働力として使役するわけではないのであるから、あれだけ大きな国であってみれば、農業労働力としても、工業労働力として

も人口が不足してくることは当然といわざるを得ない。そうした不足する人口を補うために、同国民を本国から呼び寄せる。さらには英仏系等の移民だけでは足りないから、ヨーロッパ全土に後発の移民送出国家が出来する。

北米大陸で言うなら、最初に移民してきたオランダ人、イングランド人、スコットランド人、ウェールズ人、フランス人、スカンジナビア系の人々に続いて、ドイツ系の人々が入ってきたり、アイルランド系、イタリー系、さらにウクライナ系やロシア系の人々が入ってくる。

このように各種のヨーロッパ系の人々が入ってくるが、それだけではまだ足りないから、黒人奴隷を輸入する。さらには、西部の開拓という状況になってくると、米西海岸に近いところからの人口移動を人為的に促進させることになる。すなわち中国からの移民を導入することになるのである。

ところが、この中国系の人々がやって来て、どういう状況で働いていたかというところ、これはほとんどクーリー的な状況の継続といわざるを得なかった。黒人の人々が奴隷とするならば、中国系の人々は半奴隷的な格好で使役されたといえよう。ところが、それでも本国での生活よりはまだよいということでもって、中国系の人々はよく厳しい使役に耐えた。

こうして低賃金でよく働くので、結局、中国系の人々は、プアーホワイトと称される人々から排斥されることになっていったのだ。即ち、社会の最下層にあった白人の人々にとっては、自分たちの職を奪う存在として、中国系の人々が認識されることになったのだ。

しかも、一応、ヨーロッパ的な文化の洗礼を受けているプアーホワイトの人々は、曲がりなりにもユニオンを結成して、労働者対資本家という対応をしようとしていた。けれども、そうした概念がまだ希薄だった中国からの移民の人々は、それこそスト破り的な行動を採ったりすることもあり、また、プ

アーホワイトの人々よりも安い賃金で懸命に働いていた。

中国系の人々がそういう状態だったために、結果としてプアーホワイトの人々から敵視されるという状況が生じてきた。結局は、そのプアーホワイトの人々の圧力が元になって中国人移民の排除が画策されることになる。中国からの移民には人頭税が課せられることになる。が、貧しい中国からの移民の人々が人頭税など払えるわけがない。こうして実質的には中国人のアメリカへの入国を禁止するというような事態へと進展していくことになる。

しかし、中国人の労働者が入ってこなくなったことに伴って、西海岸の労働力不足が深刻になっていく。そこで、新たな労働力が必要になってくる。そこに、日本人労働者が移民として北米大陸へ渡る歴史的必然性が生じるようになった。

その当時、すなわち明治維新以降、日本が近代に入って以降は、日本も遅ればせながら資本主義化の道を歩んでいた。資本主義的な発展を遂げていくために、無産労働者を創出しなければならなかった。その課題に応える形で、農村に対する厳しい統制、重税が課せられることになっていった。そうした中で、農民層分解が顕在化し、都市に向かう無産労働者が創出されてくる。

ただ、日本の工業力は、まだ明治期においては大したことが無かったといわざるを得ない。わけでも日清・日露戦争以前における日本は、農業国家という位置付けをせざるを得ない状況であった。

したがって、農村を出ざるを得ない人々の受け皿としての都市は十全なものとはいえない状況下にあった。こうした資本主義の道を歩み始めたばかりの国にとって、労働市場の開拓は至上命令的な課題といわざるを得なかった。小国であってみれば、それが海外に求められることにも必然性があった。

日本における資本主義の発展と海外への移民の関連と、ヨーロッパにおける資本主義の

発展と海外への移民の関連との間には、全く違った観点から捉えなければならない面と、共通した面とがある。この相違点と共通点を明らかにしていくことは、移民研究における重要なポイントになるのではないかと私は考えている。

さて、先ほど述べたような事情で、中国人移民の代替として、日本人移民が北米大陸に渡っていった。その彼らが現地でどういう状況に直面したかということ、中国人移民以上に日本人移民は頑張って懸命に働いたために、排斥されることになったのだった。

19世紀、特にその後半に入って、カリフォルニア州、その他の諸州で人口が増大し、それに伴って農業生産の拡大が緊急を要する課題となってきた。さらに東部の工業地帯との連結という意味において大陸横断鉄道の敷設もこれまた焦眉の急を要する作業になっていた。

そこで、北米に渡った日本人移民は、鉄道建設に従事したり、農業労働者として農園に雇われたりというかたちで働くことになる。

彼らは、酷使に耐えて、黙々と働いたので、たちまち彼の地に根を張っていく。そうすると、またぞろプアーホワイトの人々の反発を買うことになる。

プアーホワイトがなぜ、中国人移民を排撃したかといえば、自分たちの労働市場を奪われるということに尽きる。自分たちの職を奪われることに対する危機感が、彼らが中国人たちを排撃した、唯一の理由と言っても決して過言ではない。勿論、差別・偏見意識に基づいて、彼らは、中国人の移民たちは不潔である等々、まことしやかな排斥の理由を準備してはいた。

しかし、現実的には経済的な理由が一番大きかったのである。こうして中国人の移民たちを排撃してきたプアーホワイトの人々は、それに代わった日本人移民は、中国人移民以上にこまめによく働き、低賃金で我慢したために、自分たちの職が今度は日本人によって奪われてしまうのではないかという危惧の念

を持つに至る。

しかも初期の日本人移民の人々は、北米において非常な差別を受けた、偏見を持って見られたということもあって、そこで定着する、永住するというような意思、意図は持っていなかった。一攫千金を夢見て、ある程度お金を稼いだら日本へ帰ろうという、所謂、錦衣帰郷を志向する移民の人々が多かった。

それがまた白人たちの反感を買うことになった。日本人は何のことはない、やってきて、自分たちのところで働いて、富を得て、その富をアメリカに還元するのではなく、全部日本へ送ってしまう、と。こんなことでは、アメリカの富が全部日本へ環流してしまうというようなことまでささやかれた。それこそイエロー・ペリル、すなわち黄禍論的な物言いが横行したのだった。

黄色人種が白色人種を席卷してしまうというような感じの、白人の黄色人種に対する偏見が、プアーホワイトの人々の日本人移民に対する排斥の念に拍車をかけたとも考えられよう。

そうしたプアーホワイトの人々の動向を背景にして、カリフォルニア州、オレゴン州、ワシントン州、当時の英領コロンビア等において、日本人移民に対する直接的な暴力、言論による暴力が多発するようになった。

こうした状況を背景にして排日政治家といった、アジテーターのような政治家が西海岸各地に輩出する。これらの政治家たちが中心になって、米加において、日本人移民を制限しようという動きを活発化させる。

そのような動きの集大成として、1924年に至って米国で排日移民法が成立し、これによって日本人移民が合法的に禁止されることになった。

## 5.

移民史は、善きに付け悪しきに付け、アメリカ史そのものであるはずである。こうした見方は、オスカー・ハンドリン等の学者に

よって唱えられたけれども、結局、現実のアメリカ史はそうではないままである。アメリカの歴史といえば、先述のようにネイティブの人々が住んでいた時代をプレ・ヒストリーと称し、それ以降の白人の歴史を正史として描いているに過ぎない。

しかも、それは移民史というような謙虚なものではなく、いってみればアメリカの白人の栄光の歴史が描かれているのに過ぎない。

それに対して、特殊なジャンルとして、たとえば、アメリカ黒人史、アメリカ女性史等がある。

こうしたジャンルがまだ存在していること自体が、女性に対する差別がかなり残っていることの証左であり、黒人が差別されていることの証左といわざるを得ない。アメリカ史が即ち、アメリカ白人史であり、アメリカ男性史であり、アメリカのマジョリティの歴史である証左ともいえよう。

まだ米国ではワスプ的な価値観がかなり重い価値を以って迎えられている。それに対するマイノリティの価値観にも目を向けてみようというような動きは古くはない。エスニシティに関心が払われるようになってきた中で、アメリカへの～白人以外の人種・民族の～入移民の歴史にも関心が向けられてきたに過ぎない。アメリカ史は移民史そのものであるという認識は、まだ共通の歴史認識にはなっていない。

しかし、だからといって移民という存在の持っている意味合いが、アメリカ史において低いのかといえば全くそうではないといわざるを得ない。非常に重要な意味合いをもっている。

ごく一般的な論とは少々異なるけれども、アメリカの場合には東部諸州が政治的経済的に非常に重要な場所であることは否めない。その諸州の農村部における農民層分解という現象は、アメリカ移民史をかんがえる場合にひとつの重要なポイントになる。

この農民層分解という状況が生じてきた中で、農民たち、特に分解した中で下層に落ち

込み、あるいは、生活苦に陥った農村の人々が、ヨーロッパ大陸の農民の人々のように、都市へ出て行って無産労働者として資本主義的工業生産を支える存在になっていったかという、必ずしもそうとは言い切れない。

東部農村部で、農民層分解によって貧困化が進んだ人々が東部の都市に出て、労働者化することも、無くはなかった。けれども、彼らには、むしろ新天地を求めて、都市へ出る代わりに西へ向かうという志向がかなり顕著に見受けられたのである。まさに、その傾向が西部開拓の歴史へと繋がっていくことになる。

東部の、ヨーロッパからの移民にとっては過ごしやすい元々の場所では、自分たちの生活がやりゆけない、また、うだつがあがらないといった事態に立ち至った人々が、都市へ出るというヨーロッパ的な行動をとるのではなく、自作農として独立する、あるいは、農業経営者として財を成すこと等を夢見て、西へ向かうといった傾向がかなり一般的に見受けられたのだ。

とすると結局、アメリカの東部の都市部においては、資本主義発展のための労働力が相変わらず不足するという状況が惹起することになってしまう。

図式的に言い直すと、ヨーロッパにおいては、農村部において農民層分解が進行したことに伴って、農村では食べられなくなった人々が都会へ出て行って無産労働者化するというのが基本的な構図であるのに対して、アメリカにおいてはそういう構図が必ずしも成立しなかったために、東部の都市部の工業労働力の不足は他のかたちで補われなければならなかったのである。では、それが何によって埋められたかといえば、ヨーロッパ各地等からの新しい移民によって埋められることになった。

ヨーロッパの一つの国の中であるならば、国内の人口移動、国内の移住ということで補完されたものが、アメリカの場合には海外からの移民～本国からの移民、あるいは本国以

外の他の新しい国々からの移民～で補完されていった。

米国東部の農民たちが都会へ出る代わりに西部へ向かった、その代替要員として、英仏等の他、アイルランド、イタリア、東ヨーロッパ等々の国々から新移民がやってきて、東部の都市部に定着をする。

そこで賃金労働者になって、アメリカの工業発展に資するという図式が出来上がる。であるから、この基本的な構図だけから見ても、米国への継続的な入移民の存在は、アメリカ資本主義発展の原動力であったといっても言い過ぎではないのだ。こうした点に鑑みても、アメリカの歴史における移民の重要性は重視して、し過ぎることは決してないといえよう。

## 6.

続いて、北米において、外国からやってきた入移民という概念が成立するのはいつごろからなのかということに思いを至さなければならぬが、これは明らかに独立革命以後ということになる。

それ以前においては、エミгранト(emigrant)という言葉しかなかった。エミгранトは、日本語で普通に訳すと「移民」とされてしまうが、厳密には「出移民」ということになる。対してイミングラント(immigrant)の場合には「入移民」ということになる。

独立革命以前のアメリカにおいては、エミгранトとして、本国を出てアメリカへやってきた人々というのが基本だったのであるから、彼らにとっては自分自身の存在もエミ格蘭トとして認識されていた。

ところが、自分たちがもうアメリカに定着してしまっているところへ、新たに自分の母国、その他から新たな移民がやってくるとなると、エミ格蘭トたる旧移民の人々にとって、新移民の人々はイミングラントとして位置付けられることになるのである。

これは、移民自身が自らの帰属する国家と



いう概念を考える場合に、自分という主体をどこにおいて見るかということと関連する問題である。初期の段階では、移民には自分はいくまで母国から出てきたエミгранトという認識が勝っていた。しかし、自らが独立国家の一員となって～独立革命を経て自らがヨーロッパの一つの国の国民であるという意識から離れて、アメリカ合衆国の市民になったという認識を持つようになって～から以降は、新たに移民を迎えるということになると、イミングラント、入移民として受け入れるという認識になる。

アメリカ合衆国が独立したことによって、米国市民の移民に関する認識も大きく変化したと考えられる所以である。この入移民、出移民への関心から諸々の観点からの移民研究がなされることになる。どうして、ある国から移民がある時期にたくさん出ているのかといったことは、その国における資本主義発達の状況と密接な関係がある。逆に移民の受容国の事情を考えてみると、これまた受容国における社会の状況、資本主義の発展の状況と関連している。

所謂プッシュ・プル論争という観点からの移民研究は、かつて欧米においては、かなり主流的な潮流であった。つまり、移民～これは移民送出国にとってはエミгранトであり、移民受容国にとってはイミングラントということになる～の理由は、送出国と受容国のどちらのほうの側の力によっているのか、母国側のプッシュする力が大きく預かって移民が多く輩出しているのか、あるいは、受容国側のプルする力が移民の大きな理由なのかという論争である。

例えば、母国の側、移民を送出する側の国のプッシュの理由としては、不況、貧困、階層分解等が考えられる。本国において経済的、社会的、政治的にアッパークラスに属する層の人々があえて移民をするかといえば、そういう例が皆無ではないけれども、稀有だといわざるを得ない。支配層の人々がわざわざ本国を出るということはあまり考えられな

い。やはり、被支配の側、貧困層が出て行くのが一般的であろう。もう一つの大きな要素として政変もある。

古い例だが、660年、新羅と唐によって百済が滅ぼされたという事件があったが、その際、百済から多くの移民～渡来人～が日本にやってきた。そして、彼らが日本文化の発展に貢献したという歴史的事実がある。

そんな古い過去の日本の経験に埃つまでもなく、政変によって、それまでかなり支配的な高い立場にあった人が窮地に追い込まれ、それに伴ってその周辺の人々もその立場を悪くすることも多々あった。それで、これ以上、本国にいてもだめだと言うことで、外国へ出るというようなケースも少なくなかったのだ。

日本において近代以降、移民が盛んになってくる中で、～これは私がまだ調査している段階であり、必ずしもそうとは言い切れない面もあるけれども～割合に移民が多く出ている地域は、佐幕方の旧藩域にかなり合致する。

東北諸藩にあって奥羽越列藩同盟の中核だった会津藩のあった福島県、伊達藩のあった宮城県等、関西で言うと御三家の紀州藩があった和歌山県、徳川家を支えた井伊家の彦根藩があった滋賀県などは名だたる移民送出県である。

琉球処分というかたちで日本に編入された沖縄県も移民多出県である。これらの各県から、どうして移民が多く輩出したのかという問題に関しては、まだ仮説を検証中の段階である。けれども、明治維新以降、佐幕方の諸藩は、かなり差別的な扱いを受けたという史実と、その旧藩域から移民が多数出ているという事実との間には何らかの相関関係が有ると見ることは、正鵠を射た見方であろうと私は考えている。

藩長土肥政権が形成されていく中で、討幕派に加わった藩域の県の発展が割合にめざましかったのに対して、徳川一族の藩、あるいは奥羽越列藩同盟等に拠って、維新政府側に

反抗した藩等は冷遇されたことは周知の通りである。

そうしたところから比較的移民が多く出ているという事実は、注目に値しよう。米国に、会津藩士たちの移民地として「若松コロニー」というのがあったが、これはまさに会津若松の人々、会津藩の人々が、もう日本は薩長の世の中になってしまっていて、自分たちは多分浮かび上がれないだろうということで、意を決して、新天地を求めて作ったコロニーだったと推測される。

このように、政変によって、自分たちの立場が危うくなった人々、このまま本国にいても浮かび上がれないだろうと考えた人々が、新しい天地を求めて移民をするということもあるだろう。この動機も、個人的な移民の動機として看過できないのである。

## 7.

次は、プルの方だが、受容国は、どういうことでもって移民をプルするのかというと、これは先ほどのプッシュする送出国側の要因を裏返して考えれば見えてくる。

送出の要因として不況が措定されるなら、対して受け入れの要因としては、好況が考えられよう。これは、ひとつの国の中であっても、また、ヨーロッパ地域の中であっても同様のことが言える。

不況の国（地域）から好況の国（地域）へと人の流れができるのは当然のことといえよう。好況で労働力不足の場所へは、それを埋めるために人々が移動する。これは明らかにプルする要因といえる。

幻想かもしれない、夢に過ぎないかもしれないけれども、大いなる富を得られるかもしれない、社会的名声を得られるかもしれない、アメリカン・ドリームを体現出来るかもしれないといった意識を人々に持たしめたことも、米国のプル要因の一といえよう。アメリカに行けば自分もそこにおいて成功した人々のようになれるかもしれない、というよ

うな夢そのものもプルする要因になっていたと考えられるのである。

個別的な話になるが、日本で、移民がかなり盛んだったところに、幸徳秋水、片山潜、山本宣治、鈴木悦等といった共産主義、社会主義、無政府主義等に共鳴していた人々が、一時期、アメリカに傾倒したことがある。片山潜などは『渡米案内』といった本まで出版している。

どうして、共産主義者、社会主義者、無政府主義者らがアメリカに傾倒したかといえれば、アメリカに対する幻想が彼らにあったからに他ならない。そして、日本に対する幻滅があったからに他ならない。日本の現状に対する幻滅が、彼らに必要以上にアメリカを美化して考えさせた。

アメリカには自由や平等がある。日本では実現していないことが、アメリカでは実現されている。そうした見方が当時の日本の反体制的な人々の中であって、それがアメリカへの傾倒に繋がった。これも一種のアメリカに対する幻想と見ることも出来ようし、あるいは幻想に限りなく近いアメリカン・ドリームへの共感とも受け止められよう。

上記の人々のような思想的な絡みはないにしても、アメリカに行けば豊かな生活が送れるかもしれないというような夢あるいは幻想が、人々をしてアメリカに向かわしめた要因のひとつであったことは言を俵たない。

移民受容国としてのアメリカは、移民国家と言わざるをえない。移民国家というと、ネイティブの人々を無視することにもなりかねないので留意する必要があるが、現実問題として、ヨーロッパからの移民が、原住民を犠牲にして造ったのが「移民国家としてのアメリカ」というような規定は間違いではない。

これは、カナダ、ニュージーランド、オーストラリア等の国にしても然り。こうした国々の基本的な性格は、移民国家として歴史的に認識せざるをえないのである。

この「移民国家としてのアメリカ」等という捉え方が、移民研究においては、非常に重

要な意味合いをもってくる。このプルする側としての受容国の経済的、政治的、社会的、文化的ありようが、移民の入ってくるあり方、入ってきて後の動向、文化変容等々、すべての面に大きな影響を及ぼすからである。プッシュする側のそれらにも留意が必要なこともいうまでもない。

以上、若干、具体的な例も交えながら、移民研究におけるマクロな視座とミクロな視座とを混交させながら、移民という状況にアプローチすることの重要性を確認してきた。

こうした基本的なスタンスを基に、私は移民研究を再開したいと考えている。

#### 参考・引用文献

- 正田健一郎「日本資本主義と移民」(社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』、1984年、有斐閣)  
岡田泰男「移民とアメリカ経済史」(同上)  
杉原薫「世界資本主義とインド人移民」(同上)  
天沼香「アメリカ村のふでばあさん」(日加協会編『日加修交50周年記念論文集』、1980年、日加協会・カナダ大使館)  
天沼香「移民史への視座」(『東海女子大学紀要』第4号、1985年)  
天沼香「移民と家族」(1)～(7)(天沼『日本史小百科〈近代〉家族』、1997年、東京堂出版)

他。